

双有理整拡大と微分加群

阪大 理 吉田 寛一

RIMS 講究録 446 において次の結果を述べた。

**命題**  $R$  をネーター的整域,  $A$  を  $R$  上の拡大環で,  $R$  とは双有理かつ  $R$ -加群として有理生成とする。このとき,  ${}^+_A R$  ( $R$  の  $A$  の中での *seminormalization*) は  $A$  の *glueing* によって得られる。今  $A = {}^+_A R$  と仮定する。

$$d: A \longrightarrow \Omega_R(A)$$

を  $A$  から,  $A$  の  $R$  上の微分加群への  $R$ -homomorphism において,  $d^{-1}(0) = C_1$  は  $A$  と  $R$  の中間環となる。  $C_1$  に対してまた同様に  $C_2$  を作るとき,  $\exists d: \text{integer } r \quad C_d = R$  となる。

これは *glueing* は点の接合に対応し,  $d^{-1}(0)$  は接平面 (高次の)

における制限を意味すると考えられる。

$A = {}_R^+R$  の条件を満たすとき、 $R$  は  $A$  の中で *cush type* とおこう。

さて先の命題では *cush type* は有限列の微分加群による不変部分環として得られることを述べたが、この逆はどうか？ 少なくとも  $R$  は  $A$  の中で *cush type* とは限らぬとして、 $B = d^{-1}(0)$ ,  $d: A \longrightarrow \Omega_R(A)$ , とすれば、 $B$  は  $A$  の中で *cush type* であるか？ 接平面での制限を考えただけなので成り立っているとおもうが、ここでは、 $R$  が標数 0 の係数体を取った場合にのみ示す。

以下では、 $d^{-1}(0) = R$  とする。

命題 1.  $d^{-1}(0) = R$  のとき、 $\text{Ass}_R \Omega_R(A) = \text{Ass}_R A/R$ 。

証明.  $d$  を integer として、 $d$  に関する帰納法を用いて示す。

$R$ -加群として、 $A/R \hookrightarrow \Omega_R(A)$  であるから、

$\text{Ass}_R A/R \subseteq \text{Ass}_R \Omega_R(A)$  である。よって

$\mathfrak{p} \in \text{Spec } R$ ,  $\text{ht } \mathfrak{p} \leq d$  かつ  $\mathfrak{p} \in \text{Ass}_R \Omega_R(A)$  ならば、

$\mathfrak{p} \in \text{Ass}_R A/R$  が成り立つとすれば、

—(2)—

$\mathfrak{p} \in \text{Spec } R$ ,  $\text{ht } \mathfrak{p} = d+1$  として  $\mathfrak{p} \in \text{Ass}_R \Omega_R(A)$  ならば

$\mathfrak{p} \in \text{Ass}_R A/R$  が成り立つ事を示す。

$d=1$  のとき,  $\text{ht } \mathfrak{p} = 1$  として  $\mathfrak{p} \notin \text{Ass}_R A/R$  とすれば,  
 $\mathfrak{p} \neq \mathfrak{a}(A/R)$ ,  $A/R$  の conductor ideal. よって,  $R_{\mathfrak{p}} \cong A$

を得る. よって  $A_{\mathfrak{p}} = R_{\mathfrak{p}}$  だから  $\Omega_R(A) \otimes_R R_{\mathfrak{p}} =$

$\Omega_{R_{\mathfrak{p}}}(A_{\mathfrak{p}}) = (0)$ . これは  $\mathfrak{p} \notin \text{Ass}_R \Omega_R(A)$ .

よって,  $\text{ht } \mathfrak{p} = 1$  として  $\mathfrak{p} \in \text{Ass}_R \Omega_R(A)$  であれば,  $\mathfrak{p} \in \text{Ass}_R A/R$  が示された. するゆえに  $d=1$  のとき, 成立.

$d$  に対しての帰納法を使う.

$F := \{ \alpha \in A \mid \text{ht } I_{\alpha} \geq d+1 \}$  とおく. ここで,

$I_{\alpha}$  は  $\alpha$  の分母イデアルである.  $F$  は  $A$  と  $R$  の中間環である.

よって,  $d': A \longrightarrow \Omega_F(A)$  において,  $d'^{-1}(0) = F$  である.

実際,  $\supseteq$  は明らか. 逆を示す.

$$(*) \quad \Omega_R(F) \otimes_R A \longrightarrow \Omega_R(A) \longrightarrow \Omega_F(A) \longrightarrow 0 \text{ (exact)}$$

よって  $\alpha \in A$  が  $d'(\alpha) = 0$  とすれば,  $\exists \beta_i \in A, \exists r_i \in F$   
 として  $d(\alpha) = \sum \beta_i d r_i$ .  $d^{-1}(0) = R$  故  $\text{Ann } d r_i = I_{r_i}$ ,  
 よって  $\bigcap \text{Ann } d r_i = \bigcap I_{r_i} =: \mathcal{O}$  とすれば,  
 $\text{ht } \mathcal{O} \geq d+1$  を得る. これから  $I_{\alpha} = \text{Ann } d\alpha \supseteq \mathcal{O}$  故  
 $\text{ht } I_{\alpha} \geq d+1$  と有り,  $\alpha \in F$ .

$\Delta := \{ \mathfrak{J} \in \text{Ass}_R A/R \mid \text{ht} \mathfrak{J} \leq d \}$  とおく。

$\mathfrak{J} \in \Delta$  とすければ、 $\text{ht} \mathfrak{J} \geq d+1$  故  $\mathfrak{J} \notin \mathfrak{J}(F/R)$ 。

よ、 $\tau$   $R_{\mathfrak{J}} \supseteq F$ ,  $P = \mathfrak{J} R_{\mathfrak{J}} \cap F$  とおく。

$\Delta' := \{ P \mid \exists \mathfrak{J} \in \Delta, P = \mathfrak{J} R_{\mathfrak{J}} \cap F \}$  とおく。

このとき、 $\text{Ass}_F A/F = \Delta'$  である。実際、 $\Delta' \rightarrow P$  と

すければ、 $\exists \mathfrak{J} \in \Delta$   $\tau$   $P = \mathfrak{J} R_{\mathfrak{J}} \cap F$ 。  $\mathfrak{J} \in \text{Ass}_R A/R$  故、

$\exists \alpha \in A$   $\tau$   $\mathfrak{J} = I_{\alpha}$ 。よ、 $\tau$   $R_{\mathfrak{J}} \hookrightarrow A/R$ ,  $\tau$

$\otimes_{R_{\mathfrak{J}}} R_{\mathfrak{J}}$  から  $R_{\mathfrak{J}}/R_{\mathfrak{J}} \hookrightarrow A_{\mathfrak{J}}/R_{\mathfrak{J}} = A/F_P \therefore R_{\mathfrak{J}} = F_P$ 。

よ、 $\tau$ ,  $R_{\mathfrak{J}}/R_{\mathfrak{J}} = F_P/F_P \hookrightarrow (A/F) \otimes_{F_P} F_P$  故  $P \in \text{Ass}_F A/F$  を得た。

逆に  $P \in \text{Ass}_F A/F$  とすければ、 $\exists \alpha \in A$   $\tau$ ,  $I_{F, \alpha} = P$ ,

( $I_{F, \alpha}$  は  $\alpha$  の  $F$  上での分母イデアル),  $P \cap R = \mathfrak{J}$  とおく。

今  $\text{ht} \mathfrak{J} \geq d+1$  とすければ、 $\mathfrak{J} \alpha \subseteq F$  から  $\alpha \in F$ ,

これはあり得ない  $\tau$   $\text{ht} \mathfrak{J} \leq d$ 。従、 $\tau$   $R_{\mathfrak{J}} = F_P$ ,

よ、 $\tau$ ,  $F/P \hookrightarrow A/F$  から  $R_{\mathfrak{J}}/R_{\mathfrak{J}} \hookrightarrow A_{\mathfrak{J}}/R_{\mathfrak{J}} = A/F_{\mathfrak{J}}$

よ、 $\tau$ ,  $\mathfrak{J} \in \text{Ass}_R A/R$ 。

以上から  $\text{Ass}_F A/F$  の各元は  $\text{ht} \leq d$  故帰納法の仮定

から  $\text{Ass}_F A/F = \text{Ass}_F \Omega_F(A)$ 。

$\mathfrak{J} \in \text{Ass}_R \Omega_R(A)$  と  $\text{ht} \mathfrak{J} = d+1$  とす。今  $\mathfrak{J} \notin \text{Ass}_R A/R$

とす。  $\mathfrak{J} \supseteq \mathfrak{J}(F/R)$  とすければ、 $\text{ht} \mathfrak{J} = d+1$   $\tau$   $\text{ht} \mathfrak{J}(F/R)$

$\geq d+1$  故  $\mathfrak{p}$  は  $\mathfrak{a}(F/R)$  の minimal prime divisor,  $\therefore$  のとき  
 ([3], 1-1) から  $\mathfrak{p} \in \text{Ass}_R A/R$  を得るが,  $\mathfrak{p} \notin \text{Ass}_R A/R$   
 となるので,  $\mathfrak{p} \notin \mathfrak{a}(F/R)$  である. よって,  $R_{\mathfrak{p}} = F_{\mathfrak{p}}$ ,  
 だから  $\Omega_{R_{\mathfrak{p}}}(F_{\mathfrak{p}}) = 0$ . (\*) の exact sequence に  $\otimes_R R_{\mathfrak{p}}$  を施  
 せば,

$$\Omega_{R_{\mathfrak{p}}}(A_{\mathfrak{p}}) \cong \Omega_{F_{\mathfrak{p}}}(A_{\mathfrak{p}})$$

$\therefore$   $\mathfrak{p} \notin \text{Ass}_F \Omega_F(A) = \text{Ass}_F A/F \neq \mathfrak{p} R_{\mathfrak{p}} \cap F$ ,  $\therefore$   $\mathfrak{p} \in \text{Ass}_R(A)$  に反する. よって  $\mathfrak{p} \in \text{Ass}_R A/R$ .

最後に  $R = d^{-1}(0)$  であれば  $R$  は  $A$  の中で cusp type である  
 事を示す.

定理.  $R$  は標数 0 の体を含まないとする.  $\dim R < +\infty$ .  
 $A$  を  $R$  上 双有理な拡大で,  $A$  は  $R$ -加群として有限生成と  
 する.  $\mathfrak{p} = d^{-1}(0) = R$ ,  $d: A \longrightarrow \Omega_R(A)$ , であれば,  
 $R$  は  $A$  の中で cusp type である.

証明.  $R$  が  $A$  の中で cusp type であるための必要十分  
 条件は,  $\text{Spec } A \longrightarrow \text{Spec } R$  が bijective で, 対応する  
 residue fields が一致している事である.  $\mathfrak{y} = \mathfrak{p}$  を  $B$  を  $A$   
 と  $R$  の中間環とすれば,  $R$  が  $A$  の中で cusp type である事  
 を示すためには,  $R$  が  $B$  の中で,  $\mathfrak{y} = \mathfrak{p}$  が  $A$  の中で  $\mathfrak{y}$  だけ

crush type であればよい。

$\text{Ass}_R A/R = \{ \mathfrak{P}_1, \dots, \mathfrak{P}_t \}$ ,  $\text{ht } \mathfrak{P}_i \leq \text{ht } \mathfrak{P}_{i+1}$ , とする。

この時,  $B_i := \{ \alpha \in A \mid I_\alpha \not\subset \mathfrak{P}_1, \dots, \mathfrak{P}_i \}$  とおけば, 各  $B_i$  は  $A$  と  $R$  の中間環で,  $A = B_0 \subsetneq B_1 \subsetneq \dots \subsetneq B_t = R$  である。

よって  $\mathfrak{P}_i \not\subset \mathfrak{m}(B_i/R)$  から  $R_{\mathfrak{P}_i} \supseteq B_i$ ,  $P_i = \mathfrak{P}_i R_{\mathfrak{P}_i} \cap B_i$  とおけば,  $\text{Ass}_{B_i} B_{i-1}/B_i = \{ P_i \}$  である。従って,  $B_i$  が

$B_{i-1}$  の中で crush type である事を示せればよいが, 先の命題の証明と同様にして,  $d_{i-1}: B_{i-1} \longrightarrow \Omega_{B_i}(B_{i-1})$  に

おいて,  $d_{i-1}^{-1}(0) = B_i$  を得る。以上から, 我々は,

$\text{Ass}_R A/R = \{ \mathfrak{P}_1 \}$  の場合に帰着する事が出来た。

$R$  が  $A$  の中で crush type である事を示すために ([3], Prop 3.2) を使おう。便利のために, 示すべき事を書き出してみると,

(i)  $\mathfrak{P}_1$  上の  $A$  の prime ideals はただ一つ。それを  $\mathfrak{P}$  とおけば

(ii)  $\mathfrak{P}_1$  と  $\mathfrak{P}$  の residue fields は一致,  $\mathfrak{P}_1$  の residue field を  $k(\mathfrak{P}_1)$  と書く。

(iii)  $B_{\mathfrak{P}_1}$  は  $A/\mathfrak{P}$  の中で crush type。

以上の3つである。

(i) を示す。  $R$  上の  $A$  の prime ideals を  $P_1, \dots, P_l$  とする。

今  $l \geq 2$  とする。  $A_3$  と  $R_3$  において、  $R_3$  上の  $A_3$  の素イデアルは  $P_i A_3$  であり、  $d_3: A_3 \longrightarrow \Omega_{R_3}(A_3)$  において、  $d_3^{-1}(0) = R_3$  である。 ( $\because \text{Ass}_R A/R = \text{Ass}_R \Omega_R(A) = \{P\}$ )

conductor ideal  $\mathfrak{c}(A_3/R_3) = Q_1 \cap \dots \cap Q_l$ ,  $Q_i$  は  $P_i A_3$  に付く primary ideal, の分解が与えられ、  $Q_i \subseteq P_i A_3$  である。従って、  $A_3/\mathfrak{c}(A_3/R_3) = A_3/Q_1 \times \dots \times A_3/Q_l \cong k \times \dots \times k$  を得る。

よって、  $A_3$  の元  $\alpha$  で  $\alpha-1 \in Q_1$ ,  $\alpha \in Q_2 \cap \dots \cap Q_l$  とあるものが存在する。  $\alpha(\alpha-1) \in \mathfrak{c}(A_3/R_3) \subseteq R_3$  故

$d_3(\alpha(\alpha-1)) = (2\alpha-1)d_3\alpha = 0$ ,  $\forall \alpha \in A_3$  の unit なるので、  $d_3\alpha = 0 \implies d_3\alpha = 0$  より、  $\alpha \in R_3$  であるが、  $\alpha \in R_3$  とすれば  $\alpha$  は  $A_3/\mathfrak{c}(A_3/R_3)$  で diagonal に入るので

矛盾、  $\therefore l=1$  である。  $R$  上の  $A$  の素イデアルを  $P$  とする。

(ii) を示す。  $A_P/\mathfrak{c}(A_P/R_P)$  は local Artin 環で、係数体を含まないので、Cohen の構造定理によつて、  $i: k(P) \hookrightarrow A_P/\mathfrak{c}(A_P/R_P)$

今  $k(P) \not\subseteq k(P)$  とする。ある  $A$  の元  $\bar{\alpha}$  で  $\bar{\alpha} \notin k(P)$  とあるものが存在する。  $\alpha \in \mathfrak{m}_P$  としてよ。  $ch k = 0$

なので、  $R$  係数の多項式  $f(x)$  で  $f(\bar{\alpha}) \in \mathfrak{c}(A_P/R_P) \subseteq R_P$  かつ  $f'(\bar{\alpha}) \neq 0$  とあるものがある。このとき  $f'(\bar{\alpha}) \notin P A_P$

故  $f'(\bar{\alpha})$  は unit,  $\forall \alpha \in R_P$  である。

$\gamma$  として  $0 = df(\bar{\gamma}) = f'(\bar{\gamma}) d\bar{\gamma}$  であるが,  $\overline{f'(\bar{\gamma})} \neq 0$  であるから,  $f'(\bar{\gamma})$  は  $A_P$  の unit なので,  $d\bar{\gamma} = 0$  を得た。

$\therefore \bar{\gamma} \in R$  となり, 矛盾,  $\gamma$  として  $h(P) = h(\bar{\gamma})$  を得た。

(iii) を示す。このために  $d = \dim R$  に肉する帰納法を用いる。

$d = 1$  のとき, (iii) は (ii) と同じである。よって成立。

$d > 1$  として,  $\dim R < d$  であれば定理は正しいとする。

(iii) を示すために,  $A/R$  を更に細分する必要がある。

$\text{Ass}_R \Omega_R(A) = \{P \cap R \mid P \in \text{Ass}_A \Omega_R(A)\}$  であるから,

$\text{Ass}_A \Omega_R(A) = \{P\}$ , よって  $\Omega_R(A) \otimes_A A_P = \Omega_{R_P}(A_P)$  は Artin

$A$ -加群, 従って有限の長さを持つ,  $\gamma$  を

$$M_0 = \Omega_{R_P}(A_P) \supseteq M_1 \supseteq \dots \supseteq M_t \supseteq M_{t+1} = (0)$$

$$M_i / M_{i+1} \cong A_P / P A_P \quad \text{とする。}$$

$$d_\gamma: A \longrightarrow \Omega_{R_P}(A_P) \quad \text{において, } d_\gamma^{-1}(M_i) = C_i$$

とおけば,  $C_i$  は  $A$  と  $R$  の中間環であり,  $P_i = P \cap C_i$

とおけば,  $P_i = \text{Ann}_{C_i} \Omega_{C_i}(C_{i-1})$  である。よって,

$$d_{i-1}: C_{i-1} \longrightarrow \Omega_{C_i}(C_{i-1}) \quad \text{において, } d_{i-1}^{-1}(0) = C_i$$

よって,  $C_{i-1}/C_i$  が unsk type である事がわかればよい。

従って我々は更に  $\text{Ann}_A \Omega_R(A) = P$  と仮定してよい。

このとき、 $P \ni \alpha, \beta$  とすれば  $d(\alpha\beta) = \alpha d\beta + \beta d\alpha = 0$

故  $P^2 \subseteq R$ ,  $\therefore P^2 \subseteq \mathfrak{a}(A/R)$  である。

さて簡単のために、 $\bar{A} = A/P$ ,  $\bar{R} = R/P$  とおく。

$$\begin{array}{ccccccc} P/P^2 & \xrightarrow{d} & \Omega_R(A) \otimes_A \bar{A} & \longrightarrow & \Omega_{\bar{R}}(\bar{A}) & \longrightarrow & 0 \text{ (exact)} \\ & & \uparrow & & \uparrow \bar{d} & & \\ & & A & \longrightarrow & \bar{A} & & \end{array}$$

において、 $\bar{d}^{-1}(0) = \bar{R}$  である事を示す。今  $\bar{A} \ni \bar{\alpha}$  で

$\bar{d}(\bar{\alpha}) = 0$  とすれば、 $\bar{d}(\bar{\alpha}) \in d(P/P^2)$  故  $\beta \in P$  で

$\bar{d}(\bar{\alpha}) = d(\beta)$ ,  $\therefore \exists \beta \in P^2 \subseteq R$  故  $d(P^2) = (0)$ ,

よって  $d(\alpha - \beta) = 0$  を得た。  $\therefore \alpha - \beta \in R$ ,

$\alpha - \beta = a$  とおけば  $\beta \in P$  故  $\bar{\alpha} = \bar{a} \in \bar{R}$  を得た。

$\bar{A}$  と  $\bar{R}$  は双有理かつ  $\bar{A}$  は  $\bar{R}$ -加群として有限生成であるから、帰納法の仮定より  $\bar{R}$  は  $\bar{A}$  の中で cusp type である。よって (iii) が示された。

系  $D$  を  $A$  の  $R$  上の derivation とする。  $D^{-1}(0) = B$  は

$A$  と  $R$  の中間環であるが、 $B$  は  $A$  の中で cusp type。

$d: A \longrightarrow \Omega_R(A)$  を  $B_1 = d^{-1}(0)$  とおき, 順次  $B_2, \dots$  を作っていき,  $B_n$  は  $A$  の中で *cuspidal type* である. このときある自然数  $d$  で  $B_d = R$  となるためには  $R$  が  $A$  の中で *cuspidal type* である必要があるが, ある自然数  $d$  で  $B_d = B_{d+1}$  となり  $B_d/R$  は *unramified* となるかと... ) と, 一般的には成立しない.

[ 1 ] M. Manaresi, Some properties of weakly normal varieties, Nagoya Math. J., 77 (1980), 61 - 74.

[ 2 ] C. Traverso, Seminormality and Picard group, Ann. Scuola Norm. Sup. Pisa 24 (1970), 585 - 595.

[ 3 ] K. Yoshida, On birational integral extension of rings and prime ideals of depth one, Japan. J. Math. 8 (1982), 49 - 70.

[ 4 ] J. Lipman, Stable ideals and Arf rings, Amer. J. Math., 93 (1971), 649 - 685.

[ 5 ] P. Samuel, Les epimorphismes d'anneaux, Séminaire d'algèbres commutative dirigé par P. Samuel, Secrétariat Math., Paris, 1968.